



2007年 2月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2007年2月
第 60 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

創刊10周年(第60号)記念号

機関誌『うか』の十年（岡田健嗣）	1
岡田さんとのこと（安田 章）	3
羽化の会11年と機関誌「うか」60号に寄せて（吉田信子）	4
視覚障害者と文字（小池上 惇）	6
点字から識字までの距離（56）（山内 薫）	9
酔夢亭読書日記（第19回）（酔夢亭）	12
見果てぬ夢を（3）（山本優子）	13
漢点字 講習用 テキスト（初級編・第1回）	16
漢点字講習会へのお誘い	20
漢点字訳書のご紹介～高橋睦郎著『百人一句』	20
漢文のページ	25
機関誌『うか』 61号以降の予定（編集部）	27
ご報告とご案内	27
編集後記（木下和久）	28

機関誌『うか』の十年

岡田 健嗣



本誌も本号で六十号を迎え、隔月に欠かすことなく発行して、十年を納めました。この間多くの方々のお世話を賜り、競争馬であれば「無事これ名馬」と、こればかりは自賛できるのではと思っております。

多くの方の中には、編集に当たって下さった（ている）各位のご尽力が最も大きな力であり、またご多忙な中、稿料なしで筆を執って下さいました（ている）各位、印刷・製本・発送の作業に当たって下さっている各位、どれ一つ欠いてもこの機関誌『うか』は世に出ないものでした。

また、視覚障害者向けに音訳の労を執って下さっている、横浜市社会福祉協議会・ボランティアセンターで活動しておられる音訳ボランティアの皆様には、とりわけ御礼申し上げます。（点字）の符号の音訳の方法さえ確立されていなくところを、（漢点字）の符号の音訳は大きなご負担になっておられるに違いありません。誠にありがとうございます。

本会がスタートするに当たつての経緯は、会員の吉田信子さんのご寄稿に詳しくご紹介されております。一九九六年一月三十一日が、横浜での漢点字訳ボランティア講習会の初日でした。この日が本会の誕生の日です。

それから一年、いよいよ本誌の発刊となりますが、その創刊号を飾ったのが、『漢字源』（藤堂明保編、学習研究社）の漢点字訳と、横浜市中央図書館への納入でした。

これは、横浜国立大学の村田忠禧教授のご尽力で、学習研究社様からソースデータを無料でご提供いただき実現したものです。また図書館への納入は、大滝正雄・横浜市議の深いご理解が実現の原動力でした。

漢点字書全九十巻という前代未聞の大部を完成できたのは、ほんの一年の経験しかない会員の協力と工夫の賜物です。点字プリンターから打ち出された用紙を、紙折から表紙付けという工程を経て完成するのですが、これらを手探りで獲得して行きました。使用する道具も、手作りで開発しました。これらは木下和久さんのご尽力と成果です。現在でも同様の作業工程を

踏んで、漢点字書を製作しております。そのことはその後の活動に、大きな自信をもたらしました。また漢点字訳の『漢字源』は、現在行っております、漢点字講習会のテキスト作成の第一資料として、大きな力となっております。

その後も毎年、漢点字訳書を製作して、中央図書館に納入しております。

本誌は、横浜漢点字羽化の会の機関誌として発刊されました。当初は、如何なる企画の元に編集するか、試行錯誤の連続でした。その中、墨田区立緑図書館の山内薫さんが、筆を執り続けて下さいました。

当初の編集方針は、メインの執筆者（山内薫、岡田健嗣）による文と、漢点字の紹介記事等の連載物、そして単発のご寄稿に支えられたものでした。現在も基本的にには変わりありません。しかし十年という時は、状況を大きく変化させて、視覚障害者が漢字を知らないでいるという現実は、おおよそ常識になりつつあるようです。（当初はそのようなことを口にすれば、怪訝な目に迎えられることになりました。）

その後、漢点字文の漢文表記、訓点の表現等、新た

な表記法の開発とその実践に、本誌の紙面が大いに利用されることとなりました。

東京漢点字羽化の会が発足するに当たって、その基盤となるNPO法人・トータルヒューマンネット（THN）二一が、二〇〇四年に立ち上げられて、定款に漢点字の普及を謳うこととなりました。同年四月から、THN二一の機関誌「うずれば」を発行することになり、本誌と合体した体裁で発刊されることになりました。

二〇〇五年にはTHN二一の主催で、東京漢点字羽化の会の前身となる、漢点字訳講習会が開かれ、終了後、東京漢点字羽化の会が発足しました。それに連れて、「うずれば」の記事も、漢点字関連のものが多くなり、いよいよ紙面の刷新が迫られる事態と受け止めております。

次号から十一年目に入ります。漢点字のテキスト作りにもより多くの時間を割かなければなりません。この紙面を、よりよく利用して行きたいと考えております。

岡田さんとのついで

安田 章



岡田さんと最初に遭遇したのは1970年代の始め頃だったと思うが、どこでどのように遭遇したのかはほとんど記憶にない。おそらく、薄暗い大学のサークル室だったのであろう。

岡田さんは私より年長であるが、学生として、サークル部員としては私の方が先輩である。後輩のくせにやけに態度がでかい奴だ、という印象が残っているのは私の思い違い、気のせいであろうか。

私達が出会ったサークルの名称は児童問題研究会、略して「児問研」であったが、児童の問題を本当に研究していたかどうかは、よく覚えていない。とにかく、当時の世情は過激な左翼運動は収束しつつあったが、それでも何か残り火のような熱気が私達にはくすぶっていて、研究や勉強するというより、実践せざる

を得ない、動きたくて仕方がない衝動が常にあった。岡田さんが大学に入学してくるちよつと前、大学は封鎖されていて、私達はその封鎖を「強行突破」し、学内で機動隊と追いかっこをしたりした興奮がまだ残ってもいた。

そんな学校の雰囲気の中で、岡田さんと出くわしたわけである。そして私達はおおいに生意気だった。自分たちの力で、世界を変えていこう、という意気込みがあった。一晩眠って朝起きたら、世界はバラ色に変わ革されている、そんなことを本気で考えたりしていた。

私達は酒も強かった。飲んでも飲んでも酔わないのである。一晩中議論しながら飲んでいたこともある。二日酔いになってもそれを二日酔いと認識しない精神構造になっていたのだろう。

意気さかな私達は、サークルの仲間達と鎌倉にハイキングにでかけ、雨上がりのぬかるみをつるんつるんひっくりかえりながら遊んでみたり、サークル対抗のソフトボール試合に参加したりした。飲んで騒いだことしか覚えていない合宿などもやった。五反田のパチンコ屋でパチンコの手ほどきをしたこともある。

ある時、岡田さんの実家に押しかけ、母上の手料理を
ごちそうになったこともある。その時聞いたビバル
ディの四季、あれは胸にしみたなあ。

思えば、青春時代だったのだ。

不真面目一辺倒な青春時代に見えるなか、マジメな
読書会も岡田さんとはやっていた。

吉本隆明の「言語にとつて美とはなにか」、サルトル
の「存在と無」などをテキストに使った。内容をも
のにしたかどうかは別ではあるが、こつこつ読み進め
た記憶がある。

今手元に当時使用した吉本隆明の「言語にとつて美
とはなにか」を取り出してみるとよく読み込んだ痕跡
が残っている。それをばらばら眺めていると、ふつふ
つと闘志めいたものを感じるのはなぜだろうか。

そうなのだ、青春時代だった、と過去形で語るほど
には私達は老成も大成もしていないのである。私達に
はなすべきことはまだまだ山積みされている。青春時
代はまだまだ現在進行中である。

私達は、もつと遠くまで行く、のである。

第60号記念

羽化の会十一年と



機関誌「うか」六〇号に寄せて

吉田 信子

横浜漢点字羽化の会は、昨年一月の十周年に続き、
今年は「うか」六〇号発行の運びとなりました。最も
古くからいる会員ということ、何か書くようにいわ
れ、十周年の時は逃げきったのですが、今回はあきら
めて雑文を寄せることにしました。

私が羽化の会の最初のメンバーとして深くかわる
ようになったのは、夫が初期の漢点字ソフト作りに挑
戦したことからはじまります。当時、漢点字の理解者
は今よりもさらに少なく、岡田さんは孤軍奮闘でし
た。私のように当初全くパソコン入力のできない者
や、夫のようにBASICをちよつとかじっただけの
者でも、他にやる人がいないなら…、と自信がなくて

もひきうけやすい気分がありました。岡田さんの側からいえば、どんなわらでもすがるしかない状況だったのでしょうか。

漢点字訳のソフト作りは、岡田さんがそれまでに入力された漢字の点字符号の膨大なデータを使い、点字（仮名点字）の規則ならわかる私と、プログラム作りの夫との共同作業でした。初めて点字文章が画面に出たときの、はれやかな感動を思い出します。

ともかくもできあがった最初の漢点字変換プログラムは、点字を知らない人にはむずかしく、手入力での編集作業がたくさん必要な未熟なものでしたが、これをさげて二俣川のライトセンターで、第1回の講習会を開きました。

墨田区緑図書館の山内さんや、墨田区ボランティアの斉藤さんのご理解と協力を支えられながら、羽化の会のメンバーは岡田さんと二人だけの出発でした。

現在、会の中心となって活動している人の多くに、第1回の受講生がいます。この時、プログラム作りに協力できるということで木下さんが来られたことは、羽化の会にとって、ほんとうに奇跡のような幸運でした。（奇跡と呼び込んだのは、それまでの岡田さんの

努力と熱意でもあったのでしょうか。）

さまざまな点字の規則もほとんど自動で処理でき、点字をまったく知らない人でも簡単に扱える点訳ソフトができました。第1回講習会で使った点訳プログラムは半年ほどでその使命を終え、木下さんの漢点字訳ソフトEIBRKは、岡田さんの希望をいれながら、どんどん改良を重ねて、羽化の会の漢点字訳の強力な武器になっています。

機関誌『うか』では、「漢文のページ」を担当しています。漢文は、返り点の扱いもよく理解しないまま終わった苦手な科目でしたが、今回もまた、他にやる人がいないなら……と逃げを用意しつつ、漢文のページの編集を引き受けました。

日本語の文章も漢字なしでは自由な読み書きができませんが、漢文こそ漢字なしではどうにもなりません。日本語文中にも、詩や格言・故事など漢文はしばしば引用されます。

漢文訓読の際の返り点や送りがなを、横一列の点字に表すには、どのように配置すればよいかが、漢文点訳の一番の難問でした。晴眼者の側からのアイディア

は、どうしても墨字の配置にまどわされ、触読に適したものになりません。結局、いつものように岡田さんが頭をしぼることになり、今のような形に決まりました。（詳しくは、二〇〇一年二月『うか』二四号「漢点字による漢文訓読文表記の試み」岡田健嗣）

この方法での点訳例として、二六号より「漢文のページ」の連載をはじめました。第一回は「少年老いやすく学成り難し…」でした。

見開き左の漢点字符号付きのページは、E I B R Kの機能（編集画面の墨字印刷）を利用して作っています。

「漢文のページ」で扱うのは、短い詩や文章のごく一部にすぎませんが、常用漢字・常用音訓などという制限のない漢字の海に足を踏み入れてみて、本来の漢字一文字（一語）の持つ意味の広さと深さにおどろいています。漢字の故国である中国に深い敬意と親しみをおぼえるこのごろです。

今年の「漢文」は、司馬遷の『史記』から始めたいと思います。

視覚障害者と文字

栃木県・小池上 惇



百年余り前視覚障害者の文字として日本の文字にあわせた点字が考案され、現在も広く使われています。盲学校ではその点字により教育が行われてきました。

点字は、表音文字です。ということは盲学校では仮名文字による教育が行われてきたということになります。視覚障害者が、漢字仮名交じり文に接することのなかった頃には、視覚障害者はもとより視覚障害者を指導する晴眼者の先生もこのことについてはやむを得ないこととして受け入れていたようです。

技術の進歩により視覚障害者も音声ワープロを利用して漢字仮名交じり文を書くことができるようになる、視覚障害者にも漢字の知識が必要だという認識が高まり、盲学校の学習指導要領にも漢字の指導という項目が位置付けられるようになりました。

そこで問題になるのは、いかにして漢字の知識を与えるかということです、その前に現在視覚障害者が

漢字とどのように関わっているかについて現状を紹介したいと思います。

私は時々社会人の視覚障害者のワープロ教室の講師を依頼されますが、その時、簡単な漢字について質問することがあります。例えば、神奈川県はどのような字を書くと思いますかと聞いたら金川と書くと思うと答えました。和歌山県も若山と答えました。こんなことは大した問題ではないと思いますが、こんなことが、晴眼者との話の中で、なんとなく違和感を与える原因になってくると思います。もう少し例を挙げる
と、「笑点」という番組がありますが、「それはどんな字を書くと思いますか」と聞いたたら「商店」というこたえがかえってきたり、文明の利器は「力」と書く
と答えたり、どうしても音だけに頼っているとそんな間違いが出てくるわけです。

社会人の全盲の人と普通文字との関わりを見ると次のように分類することができます。

一つのグループは、とにかく晴眼者とメール交換などのコミュニケーションをしたいので、仮名文字でメールを書き、晴眼者からもらったメールはそのまま読む人たち。

二つ目のグループは一応漢字仮名交じり文は書くがその変換は機械に任せ、変換結果はあまり気にしない人たち。

三つ目のグループは変換結果は気にするが、その修正は自分の漢字の知識に留まっている人たち。

そして、ほんの一部の人たちがこれではない、自分をもっと漢字の知識を得る努力をしなければと
思
つて、いろいろな方法で漢字の勉強をしている人たち
です。

盲教育を受けてきた大部分の全盲の人は自分の漢字の知識が不足していることは自覚していないし、多少自覚していたとしても不自由を感じていないのが現状です。漢点字の普及がはかどらない原因の一つがこの
よ
うな現状に起因するのではないかと思われます。

11月に関東地区の盲学校の国語の先生方の研究会で講師を依頼され、点字使用者の漢字指導について話をしました。内容は漢字かな混じり文である日本語を理解するには漢字の知識が必要であること、漢字を理解するためには形と意味と読みを知ることが必要であること、点字の漢字として漢点字があるが、始点と終点によって仮名文字との区別が容易なこと・ある程度

漢字の構成が分かること・読みやすいことなどの点で
晴眼者が漢字仮名交じり文を読む感覚で読書ができる
こと、晴眼者は常に漢字仮名交じり文に接しているの
で点字使用者は漢点字により積極的に読書する必要が
あることなどでした。

他の盲学校の先生方もいかにして点字使用者に漢字
を理解させるか苦勞されているようですが漢字の形そ
のものを教えようとされている先生、ワープロの詳細
読み機能を使って指導されている先生方から実践報告
がありました。漢字の形を知ることとはある程度必要で
すがそれにも限界があると思いますし、詳細読みだけ
で漢字の知識が定着するのも疑問ですが、もう少し
漢点字にも関心を持つてくれたらと思います。

私自身は漢点字を勉強して約20年になり、羽化の
会の皆様方のおかげで沢山の漢点訳書を読ませていた
だきました。それによって日本語の文章のリズムが
分かったこと、今までは知らなかった漢字の読み方・
使い方が分かったこと、それに何よりも大事だと思っ
たのは作者が使用した漢字をそのまま理解でき自分で
それを解釈して読む能動的読書ができたことでした。
ときどき読めない字が出てくるとある時は部首の組み
合わせを頼りに家内に聞いたりワープロの直接入力機

能を使って調べたりして新しい漢字をたくさん覚える
ことができました。

現在、私は宇都宮市立図書館で点訳校正のボランテ
ィア活動をしています。その中で漢点字活用の実践
を通して図書館の職員や点訳ボランティアの方たちに
漢点字の有用性を伝えるとともに、視覚障害者の仲間
にも自分の体験を通し、漢点字の必要性について説明
し、一人でも多くの視覚障害者が漢点字の恩恵を受け
られるよう努めていきたいと思っています。

法律の改正により特殊教育は特別支援教育となり、
一般の小中学校で学ぶ全盲の生徒が増えることが予想
されます。健常児とともに学ぶ全盲の生徒にとって漢
字の形を覚えたり手書きすることはとても難しいこと
だと思われ。漢字の意味や読み、形を覚えるとき
漢点字は普通文字と点字使用者とのインターフェース
となり視覚障害者は晴眼者と同等の立場で漢字学習に
取り組むことができます。そうやって漢字教育を受け
た点字使用者は晴眼者と同様に漢字で読書を楽しみ本
当の意味で日本語を理解することができると思いま
す。そんな時代が来ることを祈りながら私は今日も漢
点訳図書を読んでいます。

点字から識字までの距離(五六)

みどり学級へのサービス(五)

みどり学級での公開授業(一)

山内 薫 (墨田区立緑図書館)

昨年の二月一四日、緑小学校で公開授業が行われ、「みどり学級」でも公開授業を行った。今回の「みどり学級」での研究発表授業については、半年以上前から図書館に協力の要請があり、一昨年の末から検討を行い、当日四五分の授業を担任の先生方と共に行った。その時の様子を何回かに分けてお伝えしたい。

緑小学校は、墨田区の特色ある学校づくり推進校として「ふれよう、考えよう、伝えよう」読書活動を通して「一」を主題として研究活動を進めており、二〇〇二年から毎週木曜日に「読書の時間」がスタート。二〇〇四年からは「朝読書」という名称で週四回、全校を挙げて朝の読書に取り組んでいる。

小学館が発行している『小学一年生』入学直前号(二〇〇六年二月一〇日発行)の「最新小学校教育事

情！」という二ページの連載記事で、緑小学校が次のように紹介されている。

記事のタイトルは「全校の先生が読み語り 本の魅力を発見ブックタイム」とあり「墨田区立緑小学校は『朝の読書運動』に取り組んでいます。

火曜日から金曜日までの、1時間目」や授業が始まる始まる前の10分間、自分が好きな本を黙って読む。

それが『朝の読書運動』です。

ルールは①毎日やる、②みんなでやる、③好きな本でよい、④ただ読むだけ、とわずかにこれだけです。

この運動は、ただ単に本を読んで、読書の楽しみを発見することだけでなく、『読書を通して、人とかかわりながら、心に感じたことを素直に表現できるようになる』、『いろいろな考えを知り、共感できるようになる』、『いろいろなことに興味や関心を示し、前向きに行動できるようになる』『さまざまな価値観に触れ、自分で正しく判断できるようになる』ことを目標としています。

緑小学校の田村康弘校長先生は、

『良い本をたくさん読めば、やさしい気持ち、正しい気持、強い力が心にたまる』という意見を持っています。そこで、学校を上げて読書好きな子どもを育成

する運動に熱心に取り組んでいるのです。

一年生は入学当初は、まだ字が読めないので担任の先生が読み語りをしています。

この学校では、読み聞かせを『読み語り』といっています。読む側が、心を込めて語ることで、子どもたちの心に届くというこだわりを込めたことばです。」

この記事の中で図書館は「この学校には、教室はもちろん、廊下にも玄関にも本がいっぱいならんでいます。子どもたちが自分で読みたい本は、近くの区立図書館でまとめて借りてきていますのです。区立図書館がすぐそばにあるというのもこの学校のメリットのひとつかもしれません。」という一節に登場する。

また、公開授業が終わった二〇〇六年三月八日の日本経済新聞「春秋」の欄でも「『本を読む時間です。自分の席に座りましょう』。校内放送が流れ、元気な朝のざわめきがピタリと消えた。八時半、『朝の十分間読書』の時間だ。三年一組は静寂そのもの。一斉に本に向かう姿は自然で、子供たちがりりしく見えた。

▼東京・墨田区立緑小学校は、朝の読書運動のモデル校的存在だ。東京大空襲（一九四五年三月十日）を語り継ぐ『ガラスのうさぎ』の作者・高木敏子さんの母校である。たった十分間でも読書によって子どもた

ちは変わっていくものだ。原則は毎日やる、みんなでもやる、好きな本でよい、ただ読むだけ、というもの。

▼授業中、落ち着かない子供も本を媒介にして静と動の切り替えを覚えていく。なるほど黙読とは『黙る』ことであり、集中することである。（以下略）」と、雑誌や新聞で取り上げられたことから、今回の公開授業は学校の総力を挙げて取り組まれていることが分かる。

それは当日配布された『二〇〇五年度校内研究集録』にも現れており、実にその冊子はA4版で八八ページに及ぶの大部なものである。みどり学級について載っているページには緑図書館の訪問について、写真に添えて次のように記されている。「『地域図書館（緑図書館）との関わり☆毎月第2木曜日読み語り』学級の児童は、図書館の方々による読み語りを毎回楽しみにしている。ま

た、読み語りの後には楽しいお楽しみみの時間を用意してくださっている。手品の時間・工作の時間・ゲームの時間など内





ている。みどり学級では、読み語りに来て頂いた次の日に、緑図書館にいくことになっている。児童はそこで、前日に読んでもらった本や好きな本を探し、学級に持ち帰って読書することになっている。」

さて、昨年度のみどり学級には一年生の男子、二年生の男子、四年生の女子、五年生の男子と女子、六年生の女子と六名が在籍しており、担任の先生二人の他に介助員の方が一名という構成になっていた。公開授業では特に二年生のK君が興味を持てるようなテーマで行えたら、というのが私たちや先生方の暗黙の了解事項になっていた。K君は二〇〇四年の四月に一年生でみどり学級に入学したが、三ヶ月ほどは机に座っていることもままならない状況で、やっと机に座って絵本の読み語りを聞けるようになったのは七月を過ぎて

容は盛りだくさんである。季節にあった催しを用意してくださるので、普段は四季に興味に向かない児童も季節感に触れられるよい機会となる

からだった。K君のお気に入りには「機関車トーマス」で、身の回りのものやサインなども多くがトーマスグッズで占められていた。トーマスの大型絵本が出たので持っていて読んで読んでのが二〇〇五年の四月だったが、あまりにトーマスに偏りすぎるということで、そのころから教室ではトーマス禁止令が出ていた。その後はアンパンマンがお気に入りになったようだったが、ある日彼がトーマス以外の絵本の一ページを開いて見ている光景を眼にした。それは『三びきのやぎのらがらどん』（マーシャ・ブラウン絵 福音館書店）のトロルが出てくる場面だった。また、モリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』（富山房）もお気に入りの絵本であることが分かり、公開授業のテーマは即座に「かいじゅう」に決まった。

『三びきのやぎのらがらどん』は以前、図書館で人形劇をやった時の脚本と音楽があるので、それを元にして先生と生徒で劇を上演する。読み語りの絵本は『かいじゅうたちのいるところ』に加えて、S君の好きな『つきよのかいじゅう』（長新太作 校成出版社）、ちよつと変わったところで『くいしんぼうのおむしくん』（槇ひろし作 福音館書店）も加えて読むことになった。

酔夢亭読書記(第19回)

酔夢亭

某月某日。

鳩に餌をやらしないで下さいと駅のホームに書かれている。それでも喜々としてパン屑などを与えている人がある。糞の害に怒っている人が多いのになぜそんなことをするのだろうか。私にとっては理解できないことなので、餌をやっている人に尋ねてみようと思った。

「あなたはなぜ鳩に餌を与えているのですか？ 迷惑になっているのを知らないのですか？」

なるだけ自然に優しく、詰問調にならないように問いかけようと思う。そう思い立ってひと月が経つが、そうした場面に出くわさないのはどうしてだろうか。

某月某日。

ある朝、玄関を出た途端に頭上からカラスの糞が落ちてきた。カラスの糞というのはご存知の通り、至極タチが悪い。これを浴びせられたらちよつとそのまま出かけるといふわけにもいかない。量が多い上、重力

の加速度もついているから、物理的な衝撃が大きい。そして精神的ショックも大きい。被害甚大かつ理不尽である。

理不尽と言えば、歩道を歩いていてバッグや身体の一部にこつんとあたつていながら、スマナイ、の一言もなく走り逃げていく人がある。あるとき、私の右肘にハンドルをこつんと当てながら知らん顔をしていく若い女性がいた。またたまえ、きみ、私は少し声を荒げ、自転車のサドルにのつたぴちぴちしたお尻を追いかけていた。待ちなさい、きみは道交法違反だ、轢き逃げだ、心の中ではそうわめいていたが実際の発声はどうなつていたかはつきりしない。

気がついたら私は道ばたでぜいぜい息を切らしていた。

某月某日。

個人的好みからすれば、偽善者よりも偽悪家の方が好きである。良い子ちゃんよりも不良の方が好きだった。今でも多分そうである。

不良になつて、毒のある言葉を吐き、自分の膿を出せばいいと思うのだが。

きれいな事、範疇に収まりきれないから、悪ぶったり毒をまき散らしたりすることにより、人間は本能的に大

きな危機を回避して生き延びてきたのではないか。

某月某日。

ただ今酔夢亭は様々な人の書いた「文章論」を読んでいるところである。

読書量が足りないことをただ恥じ入るばかり。



見果てぬ夢を(三)

山本優子



三 東京

鹿児島中学を終えた孝之進は、引き続き酒屋に住み込みで働きながら、懸命に勉強を続けた。そして、お国のためによい働きをするために、政治を学ぼうと考えを固めていった。

そして、ついに一八八六年（明治十九年）、叔父平吉や雨田、数人の友人たちの応援を受け、孝之進は一人東京に向かった。十六歳だった。東京では、雨田の恩師が下宿をさせてくれた。孝之進は、手伝いをしながら、思う存分勉強させてもらうことができた。そし

て、一八八八年（明治二十一年）十月から東京専門学校（後の早稲田大学）の政治科で学ぶ道が開かれた。一八八二年（明治十五年）に創設されたばかりの東京専門学校は全国の学徒の憧れの学び舎だった。学費は、雨田の取り計らいで、専門学校修了後に返済するということで援助を受けられることにもなった。

専門学校での生活が始まった。孝之進は夢中で勉学に励んだ。友人たちとはしばしば議論をした。何のために学問をするのか、そもそも何のために生きるのか、この点で議論が盛り上がることもあった。友人の中には、難しそうな哲学書を前に、知識をひけらかすかのように人生の目的とは何かと論じだす者もあった。孝之進は、関心深く聞き入ったが、その友人の結論は、人生の目的は模索中というところを出なかった。

「わたしの人生の目的は、りっぱなお国作りに用いられることだ」

と、孝之進は、言った。

すると、関西出身の沼田がフンと鼻を鳴らして言った。

「それが何になるねん。国のためになんぼがんばったかて、死んでしまったら、おしまいやないか」

孝之進は、たじろいだ。このいつも人をばかにしたような顔をしている友人には、ついていけないものを感じていたが、その時は特にそうだった。

（人生の目的（もくてつ）ち、なんじやろ。どしこけんめい生きてん、け死ん終わっしもとなら、あんまいむなしじやなかか……「人生の目的とは、何だろう。いくら懸命に生きても死んで終わってしまうのなら、あまりに虚しいではないか……」）

その答えを探して古今東西の本を読みあさる孝之進だった。

そのうちに孝之進に、一つの事件が起こった。課されたある論文に、「人生の真の目的を講じることなき学び舎は虚しきなり」と、日ごろから考えていたことを論じたことからだった。それは、当時の東京専門学校を批判したものと担当者を受け取られ、学校全体で問題にされるところとなった。孝之進は、謝罪を求められ、かつてない憤りを覚えた。もし、このことを一書生ではない有名な人物が論じていたとしたら、対応はどうだったろうかと、考えた。自分を押し殺して謝罪はできないと思った。孝之進は、返答の論文を提出した。

自分が書いたことが間違っているとは考えられない、若い者の不満と取られ、考えを改めよと命じられるのは、納得がいかない。真の学問を追究する学び舎では下からくる声を権力によって潰してしまつてはならないはずだ、といったことから、自らが理想と思い描いた学び舎について述べる内容だった。

そのことによって、孝之進は、退学を促された。悩んだ末、孝之進は断腸の思いで学校を去ることに決めた。一八八九年（明治二十二年）二月のことだ。東京専門学校在籍期間は五ヶ月間だけだった。

四 日清戦争

東京から郷里に戻った孝之進は、悶々としたものを抱えていた。母千代は、孝之進が学校をやめたことを非難しなかった。信念を貫いたとのことを誇りに思う、とさえ言ってくれた。孝之進は、人生の真の目的がわからないまま政治の世界に飛び出していかななくてよかった、母を助けて働きながら、人生の目的を見いだし、本当にお国の役に立つ働きをしたいと、改めて思った。

雨田にはあらかじめ手紙でいきさつを報告していた

が、これまでのお札とお詫びに出向かなくてはならない。孝之進は重い気分を抱えて雨田宅を訪ねた。

雨田は、意外にさわやかな顔で言った。

「お前いからん手紙へてがん」で、人生の目的（もくてつ）がわからんまま教師をしちよい自分（わいわれ）ん在（あい）い方を考げさせられたがよ。むしろ俺（われ）いが札（れ）を言う側（そば）じゃ。お前いには、学問（がくもん）に取（と）い組（く）ん土台（どたい）が十分に出来（で）け。ちよい。どけおつてん、そいない学問（がくもん）なしがない。学校（がっこう）（が）つこを出（で）たかどかは、問題（もんだい）じゃなか（き）みからの手紙（てがみ）で人生（じんせい）の目的（もくてき）がわからないまま教師（きょうし）をしている自分のあり方（ありかた）を考（かん）えさせられたよ。むしろ、わたし（わたし）が札（れ）を言う側（そば）だ。きみには、学問（がくもん）に取（と）り組（く）む土台（どたい）が十分にできてい（い）る。どこにいてもそれなりに学問（がくもん）はやれる。学校（がっこう）を出（で）たかどうかは、問題（もんだい）ではない」

孝之進は、師（し）の前に頭（かぶ）をたれた。

「ハルハ アケボノ ヨウヨウ シロク ナリユク ヤマギワ スコシ アカリテ……」

さつきから耳（みみ）に入（い）っていた子供の暗誦（あんじゆ）する声（こゑ）がにわかに耳（みみ）にはっきり聴（きこ）えた。

「しっかりと声（こゑ）ごわすな。先生（せんせい）のお子（こ）さあごわすか？（？）（？）しっかりと声（こゑ）ですな。先生（せんせい）のお子（こ）さんです

か？）」

孝之進（こうしん）が言う（い）と、雨田（あめだ）は、うなずいて黙（もく）りこんだ。

孝之進（こうしん）は、続（つづ）く暗誦（あんじゆ）の声（こゑ）に耳（みみ）を傾（かた）めた。

しばらくの沈黙（しんもく）のあと、雨田（あめだ）は、言（い）った。

「うちの倫太郎（りんたろ）（へりんたろ）い、ちよつ会（あ）へてくる（き）いか？」

「はい」

なぜこんな改（か）まつた言（い）方（か）をされるのだろうと少しいぶかりながら、孝之進（こうしん）は雨田（あめだ）について廊下（らうか）を通（と）り、奥（おく）に向（む）かった。雨田（あめだ）が襖（ふすま）を開（ひら）けると、狭（せま）い畳（じやう）の部屋（へや）に小（こ）さな少年（せうねん）が向（む）こうを向（む）いて正座（せいざ）し、よく通（と）る声（こゑ）で暗誦（あんじゆ）をしてい（い）た。

「倫太郎（りんたろ）、左近允（さこんじゆ）（へさこんじゆ）どんじゃ。挨拶（あいさつ）（えさ）つしやい」

父親（ちち）の声（こゑ）にゆつくりと振（ふ）り向（む）いた少年（せうねん）は、

「倫太郎（りんたろ）ごわす。初（はつ）（はい）めもして」

と、一段（いちだん）と少年（せうねん）らしい高（たか）い声（こゑ）で言（い）い、お辞儀（じぎ）をした。その腕（うで）の中から一匹（いっぴき）の猫（ねこ）が飛（と）び出（で）した。倫太郎（りんたろ）が顔を上（あ）げた瞬間（しゆんかん）、孝之進（こうしん）は、息（いき）をのんだ。端正（てんせい）な顔（かほ）の少年（せうねん）の目（め）が見（み）えていないのを直感（ちくかん）したのだ。孝之進（こうしん）は、驚（おどろ）きを隠（かく）しながら少年（せうねん）の手（て）を握（にぎ）って、よくがんばっているね、などと言（い）葉（は）をかけた。

漢点字 講習用 テキスト

初級編 第一回（全十回）

横浜漢点字羽化の会

二〇〇三年六月十五日

はじめに

これまで我が国の視覚障害者には、母国語である日本語を表記する文字がありませんでした。一九六九年に、大阪府立盲学校で教えておられた、故川上泰一先生が、〈漢点字〉を世に問われて、初めて日本語を表す文字を手にしたのでした。

しかし、川上先生のご努力にもかかわらず、残念ながらまだ公教育の場ではこの〈漢点字〉を取り上げようという気運がなく、その普及も極めて遅々としております。

本会では、改めてオリジナルな方法で、〈漢点字〉の学習環境作りに、挑戦してみることにしました。

本テキストも、独自に作成するものです。先人・川



上先生の『漢点字解説』を参考に、一つ二つの工夫を加えてみる積もりであります。

テキストの概要

1. テキストの構成

初級のテキストに収録される漢字は、教育漢字一〇四文字に、出現文字の構成の説明のために、必要な少数の文字を加えたものです。すなわち、小学校の一年生から六年生が学んでいるものと同程度の数です。

中級のテキストは、残りの約千字を収録します。

日常生活では、五、六百字を使えば不自由なく過ごせると言われています。つまり、この初級のテキストを修了すれば、かなりのところ漢字を使うという手応えを感じていただけるものと考えます。

中級では、一つ一つの漢字というよりも、語の使い方、語彙の豊かさを手に入れていただくことが目標になります。漢字の世界に踏み入っていただくことで、これまでとは違った世界が開けて行くことを、お約束します。

2. 漢字と日本語

(1) 漢字

〈漢字〉は、中国の殷の時代に作られたと言われています。今から三千年以上昔のことです。それから約千年の間に、目覚ましく発達しました。その数も増え、使用地域も拡大して行きました。しかも、『諸子百家』と呼ばれる思想家や、多くの詩人・文人をも排出しました。すなわち、文字は当初から、単に伝達のためばかりに用いられたのではなかったのです。

紀元前三世紀に、秦の始皇帝が、分裂していた中国を統一しました。そして、統治の方法として、度量衡の統一とともに、文字の統一にも着手しました。

現在の〈漢字〉は、その始皇帝の統一から続いているものです。

(2) 我が国への渡来

我が国に〈漢字〉が渡来したのは、『古事記』などの文献によれば、五世紀ころ、百濟から和迺吉師（ワニキチシ）によって、『論語』などとともにもたらされたとあります。が、いきなり文字がやって来たとは

考え難いのと、冊封として中国（後漢）からもたらされたと思しい金印が発掘されたりで、かなり以前に海を渡って来ていたと考えられます。

しかし、我が国でまとまった文書が編まれたのは、ずっと後の八世紀になってからで、『古事記』『日本書紀』、ついで『万葉集』が出現しました。

(3) 日本語と漢字

我が国には独自の文字がありませんでしたので、中国から渡って来た〈漢字〉を、日本語の表記に用いるようになりました。しかし、もともと中国の文字ですので、そのまま日本語を表すことができず、ごく初期の書き言葉は、当時の中国語をそのまま使っていたと言われています。

下るに従って、漢文を日本語式に読んだり（漢文訓読）、ひらがなやカタカナの発明など、文字表現の幅が大きく広がりました。

(4) 漢字の特徴

a. 単音節と表意文字…中国語を表記するための文字〈漢字〉は、中国の発音で読まれるようにできてい

ます。中国語の単語の最小単位は一音節ですので、
〈漢字〉の読みも、一音節です。しかも、一音節が単語の最小単位ですので、〈漢字〉も、単語を表すことになります。このことから〈漢字〉は、『表意文字』と呼ばれていますし、単語を表す文字という意味で『表語文字』とも呼ばれています。

b. 日本語の読み…〈漢字〉を日本語で読む場合、
二つの読み方があります。

①音読み…昔の中国語の読みを、日本語化した読みです。日本語の中には、この音読した漢字二文字でできた熟語が沢山あります。このような読み方の熟語を「漢語」と呼んでいます。

②訓読み…〈漢字〉を日本語読みしたものです。音節では一音節から数音節の読みまであります。例を挙げれば、

体言では、

一音節…エ(絵)、カ(蚊)、キ(木)、

ケ(毛)、ト(戸)

二音節…イエ(家)、マチ(町)、ミチ(道)、

イチ(市)、スミ(墨)

三音節…ハタケ(畑)、クルマ(車)、

ハシラ(柱)、トコロ(所)、ミヤコ(都)

四音節…ミズウミ(湖)、ヨコシマ(邪)
五音節…タナゴコロ(掌)、ヨリドコロ(拠)
用言では、語尾の活用があるため、「送りがな」という表記がされます。

ユク(行)、クル(来)、アルク(歩)、ハシる(走)、ウツクしい(美)、タマワる(賜)、ウズクマる(蹲)、ウケタマワる(承)

3. 漢点字

(1) 漢点字の創案

〈漢点字〉は、故・川上泰一先生が、大阪府立盲学校に在職しておられるとき、二十一年を超える研究の後、一九六九年に発表されたもので、漢字を表す触読文字としては、初めて世に出されたものでした。

それまで日本語を表す触読用の文字は、明治二十三年に〈日本語点字〉として公式に認められた、石川倉次先生の、カナ点字だけでした。すなわち、日本語の標準的な表記法である「漢字仮名交じり文」は、それまでは表すことができなかったのです。

(2) 漢点字の構成

〈漢点字〉は、八つの点で表されます。と言って

も、基本的なパターン「」のうち、「」と「」は、「漢点字」であることを示す〈漢点字符号〉と呼ばれるもので、文字を表す点字の符号は、これまでのカナの点字と変わらない六つの点「」です。

〈漢点字〉は、一マスものが五十七個、常用漢字のうちそれを除いたものは、全て二マスでできています。

例 漢点字のパターン…一マス「」、二マス

「」」、三マス「」」

4. テキストの進め方

(1) 基本文字と複合文字

「基本文字」とは、漢字の中の最小単位の文字を言います。漢字の分類法に〈六書〉がありますが、この中では「象形文字」と「指事文字」がこれに当たります。漢点字では、この二つに加えて、「会意文字」と「形声文字」の一部も含まれています。

「複合文字」とは、「基本文字」を部首(ブロック)として組み立てられた文字です。「六書」では、「会意文字」と「形声文字」がそれに当たります。

このテキストでは、「基本文字」とそれらによって組み立てられている「複合文字」を、交互にご紹介し

ます。

なお、「近似文字」という文字が、「基本文字」の最後に出て来ますが、「形がよく似ている文字」の意味で、「基本文字」の一つに数えられています。

(2) テキストの構成

初級は十回に分けて、またその中を何回かに分けて、漢点字のご紹介、意味と使われ方、熟語のご紹介をします。

見出し語の後ろには音読みと訓読みがあります。

次に、読みの練習文と書き取りの問題があります。

書き取りは、一回分をまとめて、郵送して下さい。

書き取りの解答を落手した後に、次回のテキストをご送付します。また、書き取りの解答を採点した結果もお伝えします。

このテキストは、後々にも役立てていただけます。文字は使って初めて身に付くものです。必ずしも覚え込む必要はありません。どんどん忘れて下さい。

忘れたら、このテキストをご覧になって、もう一度思い出して下さい。お気楽に向かっていたたくのが、漢点字学習の、最も有効な秘訣です。

漢点字講習会へのお誘い

横浜漢点字羽化の会

本会では二〇〇三年度より、点字の漢字体系の「漢点字」の講習会を行って参りましたが、二〇〇七年度も引き続き開催致します。横浜市健康福祉局、同教育委員会、同社会福祉協議会様のご後援をいただいて実施致します。

この講習会は、視覚障害者の皆さんを対象にしたものです。隔月のスクーリングと、オリジナルのテキストを使用した通信制で進めます。スクーリングでは、漢字の形と成り立ちをご紹介します。それによって漢字がより身近なものになればと願っております。

お申し込みは、以下の要領でお願い致します。

名称… 漢点字講習会

主催… 漢点字訳ボランティアグループ・

横浜漢点字羽化の会

後援… 横浜市健康福祉局、横浜市教育委員会、

横浜社会福祉協議会。

日程… 二〇〇七年五月五日、一四・〇〇

一六・〇〇（初回）。後、隔月に開催。

会場… 横浜市民活動支援センター（予定）

費用… 初級テキスト代 三、〇〇〇円、

漢点字用懐中点字器 三、〇九〇円、

会費・六カ月分 一、八〇〇円、

計 七、八九〇円。

お申し込み… 二〇〇七年四月二〇日（金）まで

に、お電話かE-MAILで。

電話… 〇三・三六一三・三一六〇

（八木沢療院・岡田）

E-MAIL : eib_okada@yhb.ne.jp



漢点字訳書のご紹介

高橋睦郎（たかはし・むつお）著『百人一句』

詩人の高橋睦郎氏著の、『百人一句』

の漢点字訳が完成しました。

（著者紹介）

高橋睦郎…一九三七年（昭和十二年）、福岡県生ま

れ、福岡教育大学卒業、詩人。

詩集『兎の庭』（書肆山田）

詩集『姉の島』（集英社）

句歌集『稽古飲食』（善財窟）

『読みなおし日本文学史』（岩波新書）

他著書多数。

（奥付より）

『百人一句』 中公新書一四五五

一九九九年一月一五日印刷

一九九九年一月二五日発行

著者 高橋睦郎 発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社

はじめに

日本人の美意識を知るのに最適の一冊をと問われたら、百人一首を挙げる人は少なくあるまい。万葉時代から新古今時代までの五百数十年間、和歌の最もよき時代の歌人百人を選び、それぞれのいかにもその人らしい歌一首ずつ合計百首を並べた、考える限りコンパクトなアンソロジーだからだ。

百人一首、精確に言えば『小倉百人一首』、七十歳

を過ぎて洛外嵯峨小倉山荘に隠棲した藤原定家が、同じ嵯峨の中院山荘に住む相舅（舅、同士のこう呼びあう）、宇都宮頼綱の襖障子に貼る色紙形に染筆するため選んだ『百人秀歌』をもとに編まれたといわれる個人的好みの強い百首だ。とはいえ日本文芸史上最高のアンソロジストのこと、古代から定家当時の現代までの通時代的な要を得たアンソロジーとなりえている。江戸時代以来、歌かるたになつて全国に流布、庶民の教養の欠かせない中心となつて今日に到っている理由だろう。

しかし、惜しむらくは新古今時代まで。当時から今日までさらに七百年十年が経っている。今日の立場から通時代的ということになると、以後の時代を含めた新しいアンソロジーが望まれる。ただし、和歌ことに短歌体の発展は新古今時代をピークに、以後は下り坂に入り、詩歌の中心は連歌、れんが、そして俳諧、はいかい品に移る。定家じしん晩年は歌作りに情熱を失い、連歌の座に惹かれていたふしもある。あるいは短歌時代の終焉を感じて纏める気になった百人一首だったかもしれないのだ。

したがって、今日までの通時代的なアンソロジーを編むとなると、新古今時代までは百人一首、それ以後

は百人一句というかたちが望ましい、と私は思う。じつ、江戸時代から今日まで、『小倉百人一首』を下敷にした百人一句が何度か試みられている。しかし、これまた惜しむらくはそれらのいずれも通時代的とは言いがたい。たとえば江戸前期万治三年（一六六〇）版の重以編『百人一句』は巻頭に宗鑑、巻末に守武と俳諧の鼻祖を置くものの、内容は当時の貞門を網羅しただけのもの、といつてよい。

『百人一句』の句とは、俳諧の第一句、すなわち発句五七五音律のことだ。第一句であるからには第二句以下を予想して作られるが、同時に独立性も高い。芭蕉七部集には発句の部があるし、蕪村の頃には発句だけの句会もあったようだ。明治の正岡子規による俳諧からの俳句の独立は、すでに江戸時代に用意されていた、といつてよい。

さらにいえば、俳諧時代に先立つ連歌時代に用意されていた、ということもできる。連歌を共作するための決まり、いわゆる連歌式目には第二句以下とは大きく異なる発句の作り方がこゝ細かに説明されているからだ。もちろん、連歌時代以前には前連歌時代があり、前連歌時代は『万葉集』の尼と家持の掛合、さらに伝説の倭建命・火焼老人の応酬にまで溯りう

る。

こう考えてくると、百人一首よりさらに古くから現代まで超通時代的な百人一句を選ぶことが可能になる。倭建命をかりに二世紀後半の実在人物とすると、二世紀から二十世紀まで十九世紀間にわたる同詩型によるアンソロジーというわけだ。

さらにまた、俳句五七五音律は日本文芸、日本詩歌の行き着いた窮極の形式で、世界文芸史規模でいってもこれ以上に短い定型は考えられまい。したがってこれを通時代的に見ることで、世界文芸の中の日本の文芸、日本の詩歌の存在理由も見えてくるのではないか。そんなわけで私の試みた『百人一句』だが、割り振りは次のとおりだ。

前連歌時代 十人 倭建命から後深草院少将内侍

まで

連歌時代 十人 善阿法師から法眼紹巴まで

俳諧時代 四十人 宗鑑から一茶まで

俳句時代 四十人 正岡子規から永田耕衣まで

内容的に見ると、『小倉百人一首』の男七十九人（うち僧十三人）・女二十一人に対して、『百人一句』は男八十五人・女十五人。しかも、俳諧時代の女

流のほとんどが尼だ。男流も連歌・俳諧時代は僧形が主流だ。もつとも、当代現存俳人の百人一句を選ぶとなると、半数以上が女流ということになるかもしれない。そこに俳諧から俳句、とくに現代俳句への変質があるのかもしれない。

なお、『小倉百人一首』は恋四十三首、雑二十首、秋十六首、その他だが、『百人一句』は発句―俳句という性質上、春・夏・秋・冬の季の句がほとんどで、雑（いわゆる無季）の句がわずかに加わる。恋の気分の句も少なくないが、原則的に季題を必須とする発句―俳句の性格上、季の句に含み込まれている。

作者を物語者に限ったのは、人間一人一人の評価は厳密には死によってしか定まらず、評価の定まっていない人のその人らしい句を選ぶことは不可能と想ったからだ。

『小倉百人一首』の短歌百首よりはるかに裾野の広い『百人一句』の発句・俳句百句の世界に、読者おひとりおひとりが日本人の美意識の豊かさを愉しんでくだされば、選者としてこんなうれしいことはない。

おわりに

なぜ「百人一首」があるのに、「百人一句」がないのだろう。

たまたま手近にあった玩具類で遊ぶように、短歌も、俳句も、詩も、ついでに作文も、選ぶことなく作り興じては投稿していた少年時代このかた、抱きつけて来た素朴な疑問だ。同じ疑問を抱きつけているうち、ないのなら自分が選んでみるというのはどうだろう、と、いつからか思うようになった。

とはいえ、これまでなかったものを選び出すのだから、何かきっかけがないことにはおいそれとできるものではない。「百人一首」とはもちろん鎌倉時代初期の歌壇の頂点にあった藤原定家が編んだといわれる『小倉百人一首』のことだが、古今の歌に通曉していた定家ですら、長男の舅である蓮生宇都宮頼綱の懇望があつてはじめてとりかかることができた仕事だ。

私の場合、蓮生は忘れた頃に思いがけないところから現われた。私の郷土、福岡最大の新聞「西日本新聞」から五十回連載随筆の依頼が来た。私の唐津の定宿に駆けつけた同紙文化部の野中彰久さんに私は、五十回を百回にしたいだいて「百人一句」ということでよろしければ、と返事をした。野中さんは私の返事を持ち返って部長と相談の結果、今回限り百回ということ、と許しが出た旨、知らせて来た。

連載随筆「百人一句」は平成十年二月十九日から始まり、日曜日や休刊日の休みながら六月半ばまで続いた。ほぼ毎日作者を選びその一句を選び二枚半の読みを書くという作業は初めての体験だったが、最初の二人を除き、私は作者も、その一句もあらかじめ決めておくことをしなかった。一回ずつ、原稿用紙に向かう時になって資料を拡げて搜した。その方が一寸先が分らず新鮮に書けるし、新鮮に読んでもらえるはずだ、と目論^{もくろ}んでのことだ。

ただ、通してわが国の文芸、ことに詩歌の歴史が見えるようにということは、心がけた。前連歌時代、連歌時代、俳諧時代、俳句時代と分け、十人、十人、四十人、四十人を当てたのも、その考えからだ。とくに前連歌時代や連歌時代の、教科書にも出てこない作者たちの発句や付句を二十回にわたって読まされて退屈に感じた人もあったかと思うが、纏^{まと}めて読んでいただけたら、筆者の意図は分かっていただけのもの、と信じている。

連載が終わった後、もう一度思いがけないことが起こった。文芸誌『すばる』編集長の片柳治さんから電話があり、「百人一句」の特集を組みたい、ついては百人の百句を並べた後にこれを読み解く対談をおこな

いたいが、相手の目当てがあるか、という。そくぎに閃^{ひらめ}いたのは、私より十歳若い^{せうもく}が、俳句の構造にまったく新しい照明を当てて瞠^{ぼう}目されている仁平勝^{にへいまさる}さんだった。未見の人ゆえ引き受けてもらえるか不安だったが、さいわい快諾を得た。

閃きは当たりだった。仁平さんの見事な導きで、これまで考えてみたこともなかったわが国の詩歌の本質、文芸の本質が、まぎれもない私じしんの声を纏^{まと}つて私の口から出て来るのを、驚いて聞くことの連続だった。ひよっとしてそれは私が言っていたの^はなく、仁平さんに言わしめられていたにすぎないのかもしれない、と、活字になったものを読み返すたびに思う。

「西日本新聞」連載の「百人一句」に『すばる』掲載の仁平さんとの対談「希望としての俳句」を加えたものが、このたび中公新書の一冊として刊行される。橋渡し役の雑誌『中央公論』編集部^{しんぶん}の関陽子さん、担当の松室徹さんに深く感謝したい。なお、新書刊行に際して、連載原稿の一部入れ替え、連載原稿・対談原稿にわたっての細部加筆をおこなったことを付記する。

司馬遷の『史記』から、「項羽本紀」と「高祖本紀」の抜粋を、数回に分けて連載します。項羽と劉邦の性格の違いがよく表されている部分を中心に選びました。

項籍少き時

卷七・項羽本紀

項籍少き時、學レ書ヲ不レ成、去リテ學レ劍。又、不レ成。項梁怒レ之。籍曰、「書ハ足ルヲ以ッテ記スルニ姓名而巳。劍ハ一人ノ敵、不レ足ラ學ブニ學バント萬人ノ敵。」於テ是ニ項梁乃チ教ニ籍ニ兵法。籍大ニ喜。又、大ニ喜。畧々知ニ其意、又、不肯ヘテ竟レ學ブ。

項籍少き時、書を學びて成らず、去りて劍を學ぶ。又成らず。項梁之を怒る。籍曰く、「書は以つて名姓を記するに足るのみ。劍は一人の敵、學ぶに足らず。万人の敵を學ばん」と。是に於いて項梁乃ち籍に兵法を教う。籍大いに喜ぶ。略々其の意を知るや、又肯えて學ぶを竟えず。

項籍Ⅱ項羽。項氏は代々、楚の武將の家系。籍は名、羽は字。

項梁Ⅱ項羽の叔父。項羽はこの叔父に養われていた。のち、項羽とともに挙兵する。

項羽は若い頃、文字を学んでも、劍を学んでもものにならなかった。叔父の項梁が怒ると、文字などは姓名が書ければ十分であり、劍は一人を相手に戦うだけだ、自分は万人を相手にする戦いを学びたいと言う。そこで叔父は項羽に兵法を教えた。項羽は大いに喜んだが、大体がわかるともうそれ以上学ぼうとはしなかった。



項 籍 少 キ 時 、 學 ビ テ 書 ヲ 不
 成 ラ 、 去 リ テ 學 ブ 劔 ヲ 。
 又 不 成 ラ 。 項 梁 怒 ル 之 ヲ 。
 籍 曰 ハク 、 「 書 ハ 足 ル 以 ツ テ
 記 スルニ 名 姓 ヲ 而 已 。 劔 ハ 一 人
 ノ 敵 、 不 足 ラ 學 ブ ニ 。
 學 バント 萬 人 ノ 敵 ヲ 。 」 於 イ
 テ 是 ニ 項 梁 乃 チ 教 フ 籍 ニ
 兵 法 ヲ 。 籍 大 イニ 喜 ブ 。 畧 ヲ
 知 ルヤ 其 ノ 意 ヲ 、 又 不 肯 ヘ
 テ 竟 ヘ 學 ブ ヲ 。



『史記』：後漢の司馬遷の著。本義(帝王の伝記)、
 世家(諸侯の伝記)、列伝(臣下の伝記)
 を中心とする紀伝体の歴史書。
 項羽は、秦の滅亡後、漢の劉邦に敗れる
 までの5年間、西楚の霸王を称して天下
 を動かした。このため、司馬遷は項羽の
 伝記を「本義」としている。

〈参照図書〉新開高明『語法詳解 史記』（旺文社）

機関誌『うか』六十一号以降の予定

編集部

本誌も六十号を迎えました。一つの節目でもありません。紙面の刷新を目的に、この四月の六十一号から、以下のような編集で発行致します。

①大枠はこれまでの方針に従い、ご寄稿を中心に編集致します。視覚障害者の文化、とりわけ文字文化に関わるご寄稿をお待ち申し上げます。

②本誌は、四十三号（二〇〇四年四月発行）から、非営利活動法人トータルヒューマンネット（THN）二一の機関誌「うずれば」と合体した体裁で発行して参りましたが、「うずれば」も二〇〇五年秋に、THN二一の主催で、漢点字訳ボランティアグループ・東京漢点字羽化の会の発足を機に、内容の大半が漢点字に関わるものになって来しました。そこでこの四月発行分から、思い切って「うずれば」を終刊し、当初の「うか」一本にまとめたいと考えております。

③THN二一の機関誌「うずれば」の目的の一つである、知的障害者のグループホーム「レインボウ白銀」の活動からの報告は、その都度「うか」の紙面に組み込むことで対応します。

④本誌には新たに、漢点字講習会用に作成している「漢点字テキスト」の連載を始めます。このテキストは、二〇〇三年から開催している漢点字講習会用に書き下ろしています。二〇〇七年度からは、講習会を東京でも開催致しますので、一般のご批判を賜れるよう、よりよいテキスト作りを求めて、公表することに致しました。

以上、読者諸兄姉に於かれましては、変わらませぬご支援をお願い申し上げます。

「報告と」案内

一 本誌『うか』が六十号を迎えました

本誌は横浜漢点字羽化の会の機関誌として、隔月に発行して来しました。本号が六十号、発刊から十年を数えることとなりました。

読者諸兄姉、執筆・編集・製本等、一連の製作プロセスを担って下さっている皆様、陰となり日向となつてご支援を賜る皆様には、心より御礼申し上げますとともに、引き続きのご支援・ご助力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

二 新年会を開催しました

去る一月二十一日（日）、一三・三〇・一五・三

○、ワシントンホテル桜木町五F、レストラン・ベイスайдで、例年のように、新年会を開催しました。

一昨年の秋に東京漢点字羽化の会が発足して、初めての合同の新年会となりました。

漢点字講習会の受講者の皆様や、トランスファ福祉サービスの事務所の皆様にも加わっていただいて、市議の大滝正雄先生、緑図書館の山内薫様、岡田の知人で文筆家の生田典子様、『うか』の表紙絵の作家の岡稲子様も駆けつけて下さいました。

本年が実り多い年になりますことを念じて、賑やかに終えることができました。

三 本誌の編集方針

ご案内の通り六十一号から、本誌の編集方針が変わります。

ご精読下さい。

四 活動拠点の一時閉鎖について

既にご案内の通り、横浜市健康福祉総合センターが、この二月から来年三月一杯、耐震・アスベスト除去工事に入りました。それに伴い同期間、ボランティアアセンターを活動拠点としておりますボランティアグループは、他の施設を臨時の拠点としなければならなくなりました。

やむを得ないこととは存じますが、一年余りという長期間の閉鎖は、かなりの痛手です。

その間、漢点字用の点字プリンターをボランティアセンターから借り受けて、トランスファ福祉サービスの事務所に設置して、使用させていただくことになりました。

その他漢点字講習会のスクーリング、活動に関わるミーティング等、雑多な困難が予想されます。会員相互に力を合わせて対応して行く所存でございます。

編集後記

▼本誌の六十号を記念して、特別寄稿をいくつかいただきました。▼本誌の創刊、点字プリンターの扱いに苦労したこと、「漢字源」の漢点字版全九十巻を完成させたことなど、初期の活動のことを振り返ると、本当に感無量のものがあります。▼漢点字の普及がいくらでも進んで、本誌の内容が、ますます充実したものになることを願わずにはられません。

(木下)

E-MAIL (岡田健嗣) : eib_okada@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》

次回の発行は4月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。